

# いわかづみ

令和四年六月 第八九号

- ◇ 村の景観と歴史・人物(8)
- ◇ 民具が語る生活史(民具⑩)
- ◇ 方言一考(ねし・ねんし・ねっし)
- ◇ モノ言うもの(小野末の絵画)
- ◇ 歴史館行事の報告・お知らせ

## 村の景観と歴史・人物(8)

### 土沢城址と土沢氏と土沢村

渡辺 伸 栄

関川村に城跡はたくさんあります。そのほとんどは、高い山の上に築かれた山城です。が、それほど高くない平地の高台に、比較的規模の大きな城跡が三つ。上関城址、垂水城址、土沢城址。勝手に名付けて「関川村三大城址」。

いずれも、本丸・二の丸・三の丸等が明確な、しっかりとした縄張り(設計)のお城です。藪の中に空堀や土塁が、はつきりと残っています。

すでに本紙 No. 82 と No. 87 で、上関城址と垂水城址は紹介しました。今回は、残る土沢城址を紹介します。

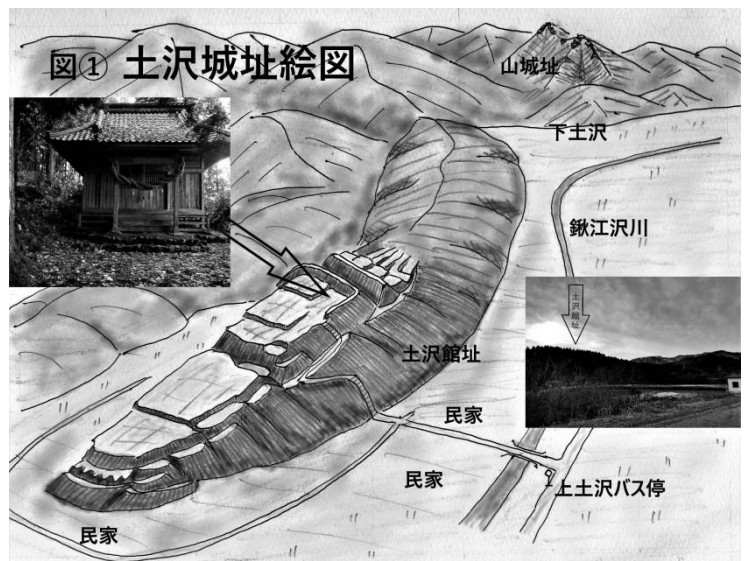
#### 一 土沢城址の位置と規模(図①)

土沢集落(本村)の背後、標高60mの山中杉林の中に、村内最大規模を誇るお城が眠っています。複雑な城郭の造りは村内随一のもので、土塁には銃撃戦用の構造が見られ、戦国時代末期の特徴を示しているそうです。

天正十四(一五八六)年、新発田重家を征伐した上杉景勝は、隣国米沢の伊達氏侵入を警戒して、伊達口に当る上関周辺の厳重警備を命じています。土沢城も緊張状態の中で補強されたのではないかと思われまます。

本丸跡には、現在、神明社(「関川村史」に白山神社とあるのは誤り)が祀られていて、麓から石段の参道が続いています。神社の裏手に、本丸を守る深い空堀があり、深さ7mは県内随一とのこと。

また、そこから西へ1.5kmほど離れた山の上、標高331mと400mの尾根のピーク二ヶ所に、戦時に立て籠もるための山城が築かれています。山中に、尾根を断ち切った空堀、斜面を均した曲輪、斜面を削った切岸などの跡があります。南北朝の争乱では、土沢城の攻防もあったとされています(「関川村史」)。この山城で合戦が行われたのではないのでしょうか。



図① 土沢城址絵図

#### 二 代々の城主は土沢氏

土沢氏は、荒河保に派遣された地頭・河村氏の一族で、鍬江沢川流域の開発と統治を担ったとされています。(「関川村史」)

その後の戦国時代に、越後では守護と関東管領との戦いが起こります。その戦いで、土沢掃部亮は守護方について戦功を上げました。天正三(一五七五)年の軍役帳では、黒川氏の配下となって長槍隊27人を負担するなど、関郷では最大の土豪武将と見られています。(「近世関川郷史料一」)

「色部氏年中行事」(一五〇〇年代末の記録)には、正月に色部家へ挨拶に出仕した者として土沢惣六郎殿と書かれ、数少ない「殿」扱いになっています。その後継者と思われる土沢左京は、上杉景勝の会津移封に伴って土沢の地を離れ、子孫は米沢藩士となって幕末を迎えます。

### 三 城下の土沢村

景勝移封の直前、慶長二(一五九七)年の記録では、土沢村の生産高は515石余、家数52で、関郷最大の村でした。江戸時代、寛政三(一七九一)年の記録では、土沢村の生産高は806石余、関郷他村と比べても(寛政十二年の下関村で473石)、土沢村が群を抜いた生産高になっています。(「越佐叢書18」「関川村史」) 湫江沢川に堰を造れば、比較的容易に周りの広い平地へ水を配ることのできる地形です(図②)。これが、早くから生産高を上げることのできた理由でしょう。また、土沢氏が地域を統率し指導力を発揮してきたことも大きいでしょう。

今に残る土沢城址の規模の大きさは、城下・土沢村の生産力の高さの表れと見る事ができます。

### 四 文化元(二八〇四)年の白川風土記から

関郷の村々の多くが幕府領だった時、土沢村は、湫江沢流域の村と共に白河藩の領地に

なっていました。白河藩領の村々を記録した「白川風土記」に、当時の様子が載っています。

村の北西に蒲原神社があり、白山様も祀っていること。神主は田村和泉、神社世話人の一人に、与四郎とあります。神主田村家は歴史館の田村舞子さんの本家で、与四郎は舞子さんの先祖。お父さんも与(與)の字を継いでいます。

神社は、一三〇〇年前の神亀年間の創設で、八四〇年前の文治年間には神主田村の記録があったと書かれていますから、相当古く、関川村随一の旧家と言えましょう。

霧出郷の名の謂れも、この神社が関係している面白いのですが、紙幅が尽きました。興味ある方は、田村舞子さんに尋ねてみてください。待つてましたとばかり、いつもの笑顔で教えてくれることでしょう。

### 民具が語る生活史 民具⑩ヤキイン

6月10日に行われた「米沢街道歴史講演会」には、沢山の方においでいただき、ありがとうございました。

質疑応答の際、大島集落の近良平さんから、「家に大島駅と書かれた印(いん)がある」と教えていただきました。後日、近さんから歴史館に届いた印は、ヤキイン(焼印)でした。大きさ

図② 朴坂山山頂からの土沢地区



は、持ち手を含めて34.5cmです。焼印部分は、縦7.8cm×横5.5cmで、「大嶋駅、陸運會社」という字が読み取れます。(写真参照)

ヤキインは、火で熱し、物に押す金属製の印で、やはり民具の一つです。今では、押す方ではなく、押されたものの方を目にすることが多くなったように思います。



イ文  
の  
字 →  
ヤキ

大嶋  
陸運  
會社

↓ ヤキイン



私は薯蕷(じょうよ) 饅頭や、ふやき煎餅が大好きですが、これらには雁(かり)や桜、菊、流水など、季節の図案が押されています。和菓子に使うヤキインも民具のヤキインも、基本的な作りや用途(焼き跡をつけて印とする)は同じです。

民具としてのヤキインは、トウミ(唐箕)などに製作者名・商標印をあらわすために押ししたり、鍬の柄(え)などに所有者を示すために家印や屋号印などを押ししたりして使いました。御商売や農業をされていた方の家では、近年まで使われていたもののひとつです。きつと、近隣の人々たちならばそのヤキインを見ればどの家のものかわかるような目印だと考えられます。例えば私の家のヤキインは、屋号の一字「興」を丸で囲んだデザインになっています。円は直径4cmほどです。10年ほど前に銅鍋を新調した際にその木蓋へ押ししたのが、一番最近の出番です。

ヤキイン所蔵者、近さんの住まれる大島は、今でこそ大きな集落ですが、慶長2(一五九七)年の「越後国瀬波郡絵図」には「土沢端村」とあり、村高や戸数は記載されていません。この後、集落は急速な発展を見せますが、そこには米沢街道の宿場としての発展が推測されています。また、集落のすぐ脇に荒川が流れ、川船で運ばれた物資を陸揚げされる場所としても賑わいました。近さんは、大島集落が宿場だったころの役人、問屋(とんや・といや)近家の分家の子孫にあたられます。

江戸時代は、宿場を介して荷物や手紙を運ぶ、「宿駅伝馬制」が整備されていました。明治時代になると、前島密によって官営郵便制度がスタートし、郵送事業と物流事業は分離されることとなります。まず、政府は明治4(一八七二)年に郵送事業を国営化します。そして物流事業の方はというと、明治5(一八七二)年、各地の宿場の「伝馬所(問屋場が明治元年「伝馬所」と改称される)」を「陸運会社」に衣替えします。こうしてかつての間屋場の役人は、政府の手厚い保護を受けた「陸運元会社」の下請けとして、全国の輸送網を支えることとなったのです。

陸運元会社はその後名称を変え、統合し、また、輸送手段も鉄道やトラックに変わっていきます。さまざまな変遷を経て、いまの日本の物流の姿はあるようです。

大島集落は宿場Ⅱ宿駅でしたが、その後に米坂線が敷かれると、昭和6(一九三一)年8月に「越後大島駅」が営業を開始し、鉄道の駅にもなります。このヤキインは、宿場の歴史を考えさせ、交通の要所「大島」を象徴するものだと思います。(田村舞子)

参考文献 小国町誌編集委員会編一九九六『小国の交通』小国町、関川村教育委員会、民具学会編一九九七「焼き印」『日本民具辞典』ぎょうせい出版、協同組合全国地区通運協会、日本通運、

### 方言一考・ねし・ねんし

「ねし」「ねんし」「ねっし」も頗る味のある方言の一つだ。古語にも終助詞「ね」はあるが使い方も意味合いも違うので、現代語の「そうですね」の「ね」が「ねし」と変化したものと思われる。本来は念を押ししたり同意を求めたりする「ね」という終助詞だが、丁寧なニュアンスもあるので、その敬語の意味合いで「ね」を使い、それを強めて「ねし」「ねんし」「ねっし」となったのだろう。敬語には尊敬語、謙譲語、そして丁寧語とあるが、その丁寧語の類だろう。「ねし・ねんし・ねっし」の伝承者、使い手として私は良くこんな会話を甲冑着装希望者とする。「お客様のお頭が少しばかり大きいので兜がちよっと無理かもねんし」・「そうだねんし、無理に被れば被れないことない

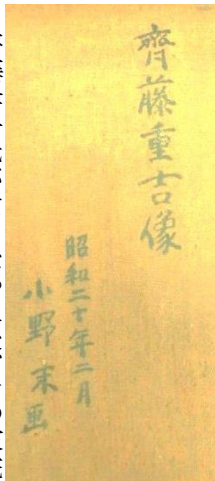
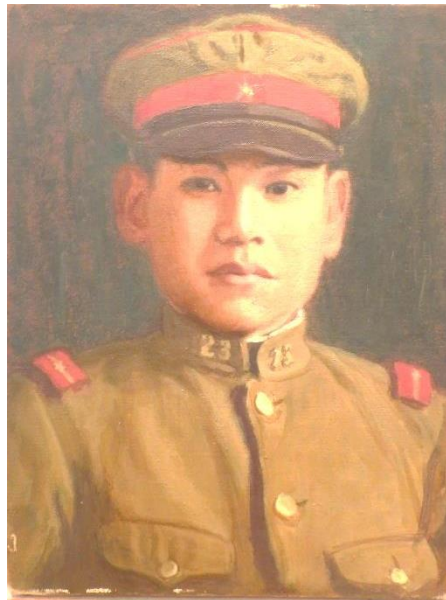


ですが、取るに取れなく危惧がありますねんし。それはそちら様にしても当方にしても大変不都合でありますねんし」・「どうしても外れなかった際はお客様に瞬時倒立をさせていただいて、その瞬間に甲冑と頭の隙間に食用油を流し込みますねんし。するとまるで嘘のようにするっと脱げますがねんし。ただお客様は文字通り脂汗まみれとなりますが、すぐ横が「ゆーむ」でございますので納得いくまで洗っていただけますねんし。それにそういう方が度々いらっしやるお蔭で兜の方の錆防止にもなっている次第です」・「ですから無理に被っても被らなくとも脂汗を流す覚悟がありならいずれ活路がありますねんし」(安久)

### モノ言つもの・小野末の絵画

先般一人の女性が紙で包んだ絵画を歴史館に持って来られたことがあって、私はなぜか小野末かなと思つた。歴史館が開館して三年目の平成八年の秋に長岡の県立近代美術館から代表作八点をお借りして「関川ゆかりの画家小野末展」を開催したが、その際地元下関に唯一残っていた作品もお借りして展示したのであった。その後どうなつたか時折思い出しては気になつていたのである。小野末(本名末吉)は新潟市出身、師範学校を出て小学校教師をした後、安井曾太郎に師事していたが、戦火が東京に及んだことで妻の実家に

疎開、戦後開園した関谷学園では美術教師を務めた。この作品「齊藤重吉像」は戦争末期二十年二月に描かれたもので、その時すでに重吉氏は戦死なされていた。おそらく家族の要望に応じ写真を元に描いたものである。その後東京に戻った画家は画業に専念、やがて頭角を現し、具象画壇の重鎮となつていく。



絵の裏の  
自筆

齊藤孝子氏が亡くなった後、その家宅を相続した新潟市の方から、一切の処分依頼を受けた鈴木正昭氏がその家の片隅に残っていた絵画を見つけて寄贈して下さいました。氏の慧眼がなければゴミとして処分された名画であった。その審美眼とご厚意に衷心より感謝申し上げます。(安久昭男)

### 歴史館行事の報告

- 「十三峠歩きと宿場巡り」①諏訪峠と小松宿・松原宿巡り 4月24日(日)、総勢22名 ②黒沢峠・貝ノ淵峠と黒沢宿巡り 5月15日(日)、総勢30名 ③宇津峠と手ノ子宿巡り 6月11日(土)、総勢31名。☆次回は9月17日(土)です!

### ○初心者のための登山「大峰山」

4月17日(日)、総勢19名

### ○春の健康登山「五頭山」

4月30日(土) 総勢22名

### ○平田住宅見学会

5月19日(木)、総勢23名(写真)

### ○古文書読講座

(4月〜6月) 進捗状況:寛政四(一七九二)年、与四良さんは、伊勢神宮を参

拝し、紀州へ!紀三井寺、和歌浦を旅しています。

### お知らせ

○村民ギャラリー「三品優油彩画展」大したもん蛇まつりや関川村内外の風景を描いた作品を多数展示します。会期:7月9日(土)〜8月28日(日)です。



### いわかがみ

第八九号

発行日

令和四年六月

編集発行

せきかわ歴史とみちの館

tel10254-64-1288 Fax0254-64-0300